

付けを行うことにより装着することは、100 万分の 1 オーダーで品質管理が行われている自動車にとっては、製造時に確保されていた信頼性を著しく損なうこととなり、再び元の信頼性を確保することは不可能である。このため、今回の検証実験では、市販の配線キットを一部活用しコネクタ接続とすることにより、既存のコードを切断することがないように配慮した。

JAMA推奨のAILS装着方法(今回の検証実験で採用)

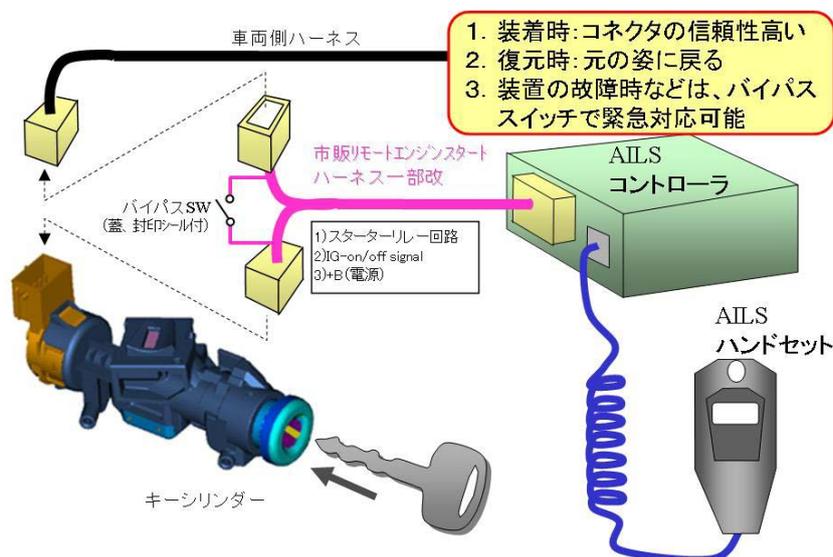


図 4.9 自工会資料 (4 頁)

○緊急時に装置不具合等によりエンジンが始動しない場合が考えられるため、この対応としてバイパススイッチを設置することとし、乱用防止のため封印シールを使用した。なお、米国の事例のように「制裁として」使用するケースにおいては、動かないことは安全であるとの考え方でバイパススイッチを備えていないが、今回の検証実験で同様に取り扱うことは困難である。

○今後の課題として、待機電流によるバッテリー上がり、アルコール・インターロック装置の電磁ノイズ発生による自動車への悪影響が懸念されることへの対応が必要であると考えられる。

○なお、プッシュエンジンスタート等の車両については、スターター・リレー配線がキーの場所に無いこと、車両内の故障診断モードへの悪影響を避ける必要があることなどから、装置を取り付ける場合には方式を別途検討する必要があったため、今回の検証実験では対象外とすることとした。

○将来的には、アルコール・インターロック装置内のリレーを小電流にも対応できるようにし、必ずしも、スターター・リレー配線にこだわらない配線とすることにより、種々の悪影響をさける配線を可能とする等、自動車本体への影響への対策が求められる。

第3節 アルコール問題関係団体 (ASKの飲酒運転対策)

民間団体における取組みについて、非営利特定法人アルコール薬物問題全国市民協会 (ASK) 今成知美代表から聴取したところ、以下の通りであった。

○ASKでは、多量飲酒と依存症に介入する必要性について要望・提言を行うとともに、海外視察、調査分析、予防教育・広報活動を進めている。

○また、ASKの分析として、飲酒運転の背景には、飲酒に寛容な社会、「これくらいなら大丈夫」という意識、飲まずにいられないメカニズムがあり、対策として、厳罰化、周囲が止める仕組み、テクノロジー、教育、治療が必要である。

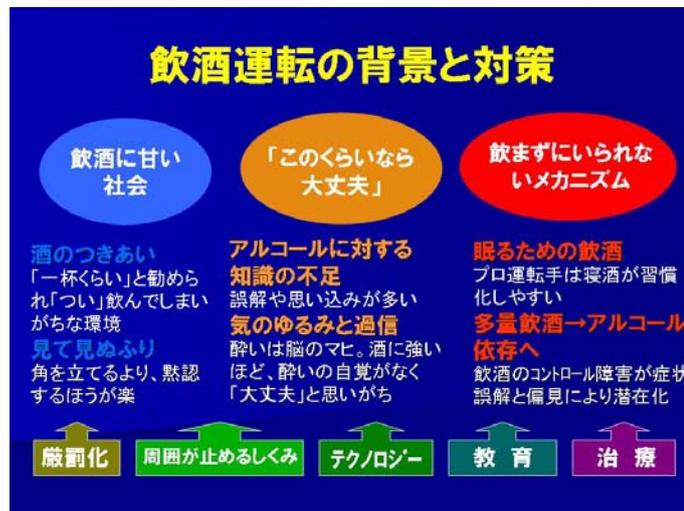


図 4.10 今成代表資料（3頁）

○また、飲酒運転を切り口に飲酒問題に介入していけば、種々の対策にもなり、社会的コストの削減にもつながるため、飲酒問題に対する早期の介入となる点で、飲酒運転への対応が重要である。

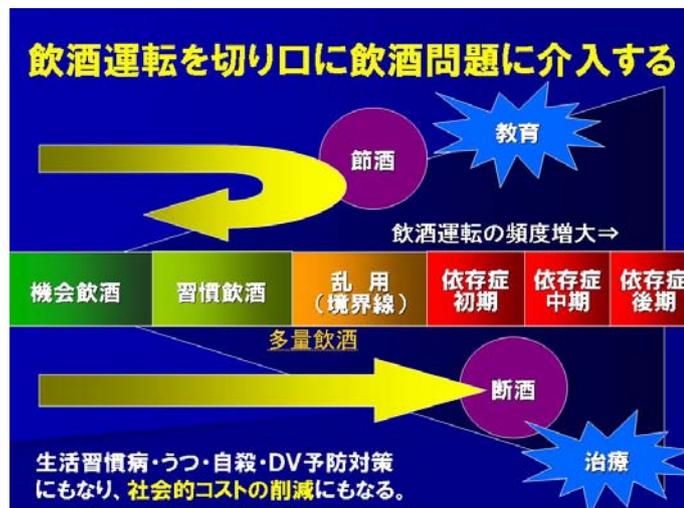


図 4.11 今成代表資料（4頁）

○ASKでは、飲酒傾向の強いプロ運転手向けの予防教育として、企業を対象にセルフケアスクールを提供している。

○企業においては、飲酒運転事故の発生や、世論の高まりなどを受け、これまでは管理を強化することにより対応してきた。しかし、処分がなされた者の勧奨退職が続くと共に、検知器の性能アップにより検知に反応する運転手などが続いているのが現状である。

○セルフケアスクールは、それまでであれば、勧奨退職につながる可能性がある者について、初回の処分があった段階で、介入し、解決を図るというものである。

○セルフケアスクールについては、3時間の講習を6回に分けて行うもので、アルコールと体、アルコールと睡眠、アルコールと事故、アルコール依存症、お酒の決算書、断り方の研究など

からなるものであり、自分の飲酒習慣を見直し、改善することを目的としているもの。

○飲酒運転防止対策は総合的に取り組む必要があり、全社員に対する、啓発・管理、ハイリスク層に対する予防教育（セルフケアスクール）、その中でも問題がある層に対する個別対応、といった複層構造による対策が必要であり、そのなかで、セルフケアスクールは予防教育としてハイリスク層への対応手段として用いられている。

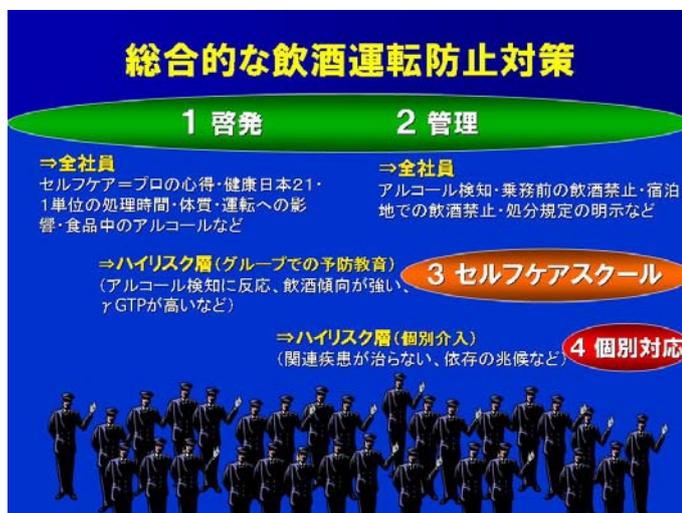


図 4.12 今成代表資料（9頁）

○これらの効果については、4回目と6回目にアンケートを行ったところでは、大いに役立つとした者が大幅に増えた。

○その役に立った中身として、実際に飲酒習慣が変化したという者が増えたことである。

○飲酒習慣の改善のために有効であった生活の工夫として、1日の飲む量を制限、置き酒をしない、食事をご飯からとした、との回答が大幅に増えていた。

○また、従来困っていたこと、改善の必要性を感じていたことで、スクールにより大幅に改善されたものとして、公休日に飲み過ぎることが挙げられた。

○これらの結果、酒を減らすことのできた受講生について、そのよい実感を確認したところ、体調がよい、家族が協力的になった、等飲酒運転を抑止するためのセルフケアスクールの結果として、生活の改善が図られていることが示された。

○次に、非常に手間が掛るセルフケアスクールに対してより幅広く全国展開を行うための簡易版として、飲酒運転防止インストラクター養成事業を開始し、3ヶ年で1000人養成を目標とし、1年目には374名が参加した。

○飲酒運転防止インストラクター養成事業では、通信教育の受講、地区別スクーリングへの参加、講座の開催とその結果の報告を経て、インストラクターとして認定証を交付される。

○また、講座を開催する際に用いるDVDは、アルコールの「単位」と体質、酔いの正体と運転への影響、寝酒の落とし穴と節酒のコツ、アルコール依存症の予防と早期発見により構成されている。

○通信スクールについても、ほとんどの参加者から、役に立ったとの回答が得られた。

○スクーリングについては、全国で19回実施した。

- プログラムの内容についても、非常に好評であり、多くの者がインストラクターとしての自信がついたとの回答をしている。
- なお、2008年1月22日現在、87名が講座を実践し、それらの講座への参加者の合計は2941名であった。
- 実践報告として、例えば、同僚が理解があり、それまで立てないほど飲んでいた者が、次の日の仕事を理由として飲まなくなったなどの報告があり、効果を感じている。